鹿児島大学文科報告　第25号　第3分冊　1990年9月　pp. 115-130　

「古典的ヴァルプルギスの夜」に於ける死の克服

長谷川　茂　夫

『ファウスト』第二部・第三幕は，その成立年代を第二幕に先んじ，ゲーテはその部分だけを『ヘレナ』[1] という標題の下に独立して上梓する計画を持ったことがあった。その幕でのファウストは，アキレウスがヘレナを妻にして子までもうけたという伝説をもとに，ゲルマン民族の長としてギリシャ神話中最高の美女を手に入れる。このヘレナが美の象徴であることは，多くの論者が認めている[2]。即ち，ここでのファウストの享楽は，第一部のグレートヒェンを単に高度にしただけの肉体的経験が目的なのではなく，美の最高形態を味わうことであって，それは精神的・芸術的範疇に属するものである。また作者ゲーテにとっても，古典古代の詩的形象を自己の作品に登場させ，自らの基盤であるゲルマン的なものと融合させることは，最高の詩的経験と言えるであろう。ゲーテがここで試みた詩的冒険は，その大胆さにおいて，神話的人物の単なる借用の域を越え，本来その神話を自己の民族の財産として所有する詩人だけに許されること，即ち，新たな異説の創造にまで踏み込んでいる。いわば古典古代の巨匠達の列に伍することになる，この企てのための腐心の跡は，幾つかの記録によって辿り得るが，その眼目は，いかにしてヘレナの肉体的復活を無理なく動機付けるか，という一事に収束される。1816年の草案では，それは「魔法の指輪」[3] によってなされることになっていた。しかし1826年の「予告(Ankündigung)」[4] では，ファウストに「第二のオルフェウス」[5] の地位が与えられ，ペルセポネイアの説得が試みられることとなる。この場面は，だが現存のテキストには実現されておらず，物語の筋としての進展は，ファウストがマントーとともに冥い通廊へと下りてゆくところで途絶える。エッカーマンの報告しているゲーテの言葉－「簡単にはいかない，運次第だ」[6] －から，これを欠如と見ることは，しかしながら適切ではないだろう。遂に書かれることのなかったペルセポネイア説得の場は，筋だての自然な運びから言えば，最も重要な場面であり，成功すれば世界文学の至宝となるべきものではある。しかし，ゲーテの天才と博識をもってしても，果たしてそれは可能なのだろうか。それは本質的には，聞くものをしてあまねく感動させたと言われるオルフェウスの音楽を再現させる試みに等しいのではなかろうか。神話に語られる力の偉大さ

は，それが失われているという条件を必須として，後代の人々の中に生きるものである。確かにオルフェウスはその力で神話的形象とはなったが，究極的には挫折したが故にこそ，一つの象徴として現代に至るまで数多くの詩人達の関心をひいている。一説には，最古の形ではオルフェウスがエウリディーケの取り戻しに成功したことになっていたものを，ヴェルギリウスやオヴィディウスが今に伝わる形に改めたという[7]。神話の持つ絶対的な力を不充分な形で具現させることは，作品全体に取り返しのつかない瑕瑾を与えることになる。『徒弟時代』でヴィルヘルム・マイスターを感動させたミニオンの歌[8]に，原詩の拙い翻訳という体裁をとらせたゲーテが，この危険性に留意しなかった筈がない。

それゆえ上述の「予告」では，雄弁をふるって実際にペルセポネイアを説き伏せる役目はマントーが担っていたことと，そしてこのマントーはテイレシアスの娘として紹介されていることにまず留意すべきである。テイレシアスは，亡霊として『オデュッセイア』にも登場する有名な予言者で，唯一冥界でも知性を保持することを許されたと伝えられる人物である。マントーはヘレナ解放の論拠として様々な先例を提出するはずであったが，その知識と能力の因って来るところは，やはり彼女の父に求めるべきであろう。そして，推測を逞しくすることを許されるならば，観客はマントーの熱弁の一部始終をすべては耳にする事は出来ず，その場面を説明するファウストの言葉を通じて，間接的に想像力をかきたてられる趣向になっていたのかもしれない。「予告」に記された「それ以上の語りかけの成り行きと流れについて，漏らすわけには行かない」[9]というゲーテの言葉は，完成した本編ではそれが聞けるという意味ではなく，上述の事情を言っていると解釈することが出来る。

しかし決定稿に於いて，彼女はテイレシアスではなくアスクレピオスの娘へと変えられている。それによって彼女の役割にも決定的な変更が加えられたと推測することは，なんら不自然ではない。即ち，この時点で彼女は必ずしもファウストの代弁者となることを求められてはいないのである。では，前述のエッカーマンとの対話[10]から推測されるように，ファウストがペルセポネイアに訴えかけることになるのであろうか。しかしファウスト自身はペルセポネイアを説得する力を持たず，また持ってはならない。彼が超自然的人物に転換されることは，この作品全体の本質に反することであり，彼自身の能力はあくまでも人間の限界内に留まるべきなのである。彼は，この世の享楽を極め尽くすためにあらゆることをする資格を認められてはいるが，それをなす資質に欠ける部分には，常に外からの助力が与えられてきた。それが契約によるメフィストの義務でもあった。

冥府の場の不在は欠落ではない，と既に述べたが，1831年6月6日付けで報告されているゲーテの満足感は[11]，彼が『ファウスト』の完成を確信していたことの証明になる。即ち，当初の予定を放棄しても，それに代わる充分なモチーフ付けが出来ている，とゲーテは考えていたはずなのである。いわば，舞台の裏でペルセポネイア説得という筋だての次元での整合性が実現されている間に，表ではそれに代わる，より深く人間の真理感覚に根差した，詩的な意志の発現が遂行される。この次元では，ヘレナはペルセポネイアの「死」から取り戻されるべきではない。陰の世界に沈んでいたのは，古代ギリシャ世界全体であった。前述のように，ここで文学的に目論まれていることは，ひとりヘレナの復活のみではなく，彼女を中心とした神話的・象徴的体系の活性化なのであり，その壮麗な展開が「古典的ヴァルプルギスの夜」なのである。

北方の悪魔メフィストーフェレスの力は，直接的にはヘレナに及ばない。悪魔の言葉を鵜呑みには出来ないのだが，そのことをメフィストは既にヘレナの亡霊召還の際に告白している。ただ間接的な援助だけが可能である。彼は，母達の国の場合にはファウストに「鍵」を手渡し，ここではホムンクルスの生成に密かに手を貸す（V. 7003f.）。しかし，どちらの場合でも彼の与えられる援助は単なる萌芽だけであり，それ以上の発展は，相手に任さざるをえない。それ故，「鍵」はファウストの「手の中で大きくなり（V. 6261）」，ホムンクルスは，「完全に人間に成り切っていないためにまだ曇ってもおらず，制限も受けない」[12]「デーモン」[13]として「成立（entstehen）」への飽くなき意志を持つ。

ホムンクルスは，ファウストの求め止まない精神（それ自体がデモーニッシュなものである）の一部でエロスと結び付きの深い創造的側面を象徴するものと言えよう。彼がファウストの失神している時に生み出されたこと，そして彼が最初にその能力を発揮するのがファウストの夢を知覚すること，しかもそれがヘレナの受胎の場面であることは，充分に示唆的である。彼は「精神的な存在」[14]として男性でも女性でもなく，ヘルムアフロディーティシュ（V. 8256）である。エムリッヒは，彼には詩的創造の寓意である「少年の御者」との共通点がある，と主張している[15]。ファウスト自身が筋だての次元でのヘレナ復活に邁進するのに対し，ホムンクルスは，言わばファウストの代理として，また一部にはメフィストの代理として，より高次の詩的次元での復活の中心となるのだが，彼自身の目的意識は，あくまでも肉体をもって成立することに限定されている。そしてメフィストーフェレスは，ヘレナの復活にどちらの次元でもそれ以上何らの尽力もせず，興味もしめさない。ホムンクルスの発案で「古典的ヴァルプルギスの夜」を訪ねるメフィストの動機は，「テッサリアの魔女」の評判である。

「古典的ヴァルプルギスの夜」の個々の場面は，それぞれ政治的・文化史的・寓話的等の何重もの意味層を形成しているが，冒頭の古戦場から最後のエーゲ海まで，上述の二つの次元での動機付けがそれぞれ全体を一貫して通っている。ひとつは，ペルセポネイアへと至る道であり，この目的にとって，復活されるものは，いわば「ヘレナ」という名前だけでよく，ファウストの行動は，マントーとの出会いで完遂される。

神話に収斂される古典文化遺産を復活させるという，より深い目的のためには，実際には舞台に現れない場面の暗示だけでも，心理的に否定の働きを及ぼすものであるので，翻ってはペルセポネイアの神格である「死」そのものが克服される必要性が，意識される。それ故，ファウストの行程を「死」への道と呼び，ホムンクルスの辿る道筋を死の止揚の過程と言い換えてもよいであろう。

ファルザロスの野に登場するエリクトーは，古戦場の死臭を身に染み込ませた魔女として描かれ，当初の「予告」ではホムンクルス達と出会うことになっていたのだが，決定稿に於ける彼女は，生命の気配を察すると自らが与える危害を恐れて身を隠す（V. 7036ff.）。即ち，ホムンクルスの生成を前にして「死」が否定されるのである。

古代の演劇が仮面（ペルソナ）をつけた俳優達によって演じられたように，一般に「古典的ヴァルプルギスの夜」では，オリュンポスの神々が司る権能も，本来の神の名のもとにではなく，ここでのエリクトーや後出のサイスモスといった比較的低い位の神話的形象や，カベイロイのように耳慣れない神格によって行使されており，いわば神々の仮面劇の様相を呈している。その意味でエリクトーをペルセポネイアの第一番目の代理とみることが可能である。

ギリシャの大地に触れるとファウストは意識を取り戻し，三者はそれぞれに「自身の冒険（V. 7065）」を求めて「炎の迷宮（V. 7079）」を巡ることになる。メフィストーフェレスがまず出会う相手は，グリュフィン達と，オイディプス伝説に於いて謎の出題者として知られたスフィンクスである。その謎は，「とても行きずりの人間に解けるものではなく，」[16] ギリシャ神話で最大の予言者の一人であるテイレシアスにも歯が立たなかった。それは即ち，オイディプスただ一人をその呪われた宿命へと導く，閉ざされた門だったのであり，謎を解けずに命を奪われた者達は，彼よりもむしろ幸運だったとさえ言える。人間以上の行為をなすには神の介入が必要だが，オイディプスの場合，恵みとみえたその力が，実は周到な呪いだったわけである。このスフィンクスの謎は，徹頭徹尾「自分自身」と結びついている。謎の答えは「人間」，即ちオイディプスであり，その報酬として彼は，本来自分のものであるテーバイの王位を手にいれ，自身を生んだ母胎によって子を成すという，彼自身の宿命へと追いやられ

る。

メフィストーフェレスに請われてスフィンクスが与えた謎は，答えの方が先に存在している。「自分のことをいえば，それでもう謎になります。(V. 7132)。」それは，トゥルンツの註[17]にあるように，オイディプスの場合と同様，解答者自身を指しており，一言でいえば「悪魔」である。即ち，スフィンクスは眼前の相手を知る能力を持ち，各人をその宿命へと差し向ける運命の手なのである。

「もっと良くあなたのことが分かるまで（V. 7116)」というスフィンクスの要求にメフィストがはぐらかしで答えた遣り取りのあと，一見唐突に星の知識の有無が尋ねられる。これは，スフィンクスがメフィストの正体とその意図を弁えていること，またヘーデリヒによれば占星術を最初に教えたのがオルフェウスであったこと[18]を考量すれば，「お前はオルフェウスの辿った冥界への道を知っているのか」という意味に解釈できる。これに対しメフィストは見たままの光景だけで答え，「降りる」と言わなければならないところを「昇る (Hinauf sich zu versteigen) V. 7130」と言って無知を露呈し，あまつさえ上述のように厚かましく謎を所望するので，もはや本気で相手にされない。「この胸糞の悪い奴はここにいるべきじゃない（V. 7139)」というグリュフィンの明確な敵意の表明に比べ，スフィンクスは物腰こそ柔らかいものの，「いかさま師（Du Falscher）V. 7148)」と不適格を指摘し，結局はラミア達によって翻弄される道へと彼を送り出す。

しかしその前に注意すべきは，メフィストがまだセイレン達の音楽に苦言を呈しているその場に，先刻別々の方向に別れたはずのファウストが突然登場することである。即ち，このペーネイオス河上流は，分岐点として特別な意味を与えられている。幾多の篝火を巡る道筋もすべてこの一点を通るのであろうことは，後に地形が変わってしまってからメフィストがホムンクルスと再会するのも，この地点であることからも推測できる。しかし，ここから先は，後述するように，それぞれの本質に従って截然と別れる。ホムンクルスがスフィンクスと出会うことがないのは，彼が純粋に精神的な存在であり，いまだ人間として成立していない，いわば宿命の無い存在だからであろう。

ファウストに対しても，スフィンクスは一貫して相手が自分自身とその宿命に直面するようにしむける。いまはファウストの宿命をヘレナと認めたがゆえに，すぐさまその道筋であるケイロンに会うことを勧めるのである。この扱いには，もはや古代の呪いの影は見うけられない。しかしこの道筋が上述の「死」へ至る道であることは，スフィンクスがエジプトでは王達の墓を守る役を担っていたこと－「ピラミッドの前に座し（V. 7245)」－と，ファウストが

ケイロンの背に乗って渡ることになるペーネイオス河の隠された性格に，まず見て取ることが出来る。ホメロスは次のように歌っている。

「この河（ティタレーシオス）といえば　ペーネイオスへと　清流の水を
そそぐが，
しかもなお，銀の渦をまくペーネイオスとは　いり混らずに，
さながら油の如くにも　その水の上側を　流れてゆくもの，
というのは，もとが恐ろしい誓いのしるしの　ステュクスの支流であるため。」[19]

即ち，ペーネイオスは，忘却の河ステュクスと重なっている。更に，ペーネイオスに関連し再度に亙って言及されるポプラー「ポプラ並木の流れ（V. 7153)」「さざめくポプラの枝（V. 7252)」ーは，第三幕ではアスフォデロスと同様に冥府に生える植物とされている（V. 9975f.)。「古典的ヴァルプルギスの夜」は，神々の仮面劇であると前に述べたが，ペーネイオスには冥府の河の役割が与えられているのである。それはまた，河の神の言葉やニンフ達の歌からも窺い知れる。ペーネイオスは，川辺の葦や柳やポプラの魔的なそよぎとさわめきによって「途切れた夢へと（V. 7253)」誘い，ニンフ達はファウストに身を横たえて憩うことを勧める。言うまでもなく眠りは死の近親である。

これに対しファウストは，断固たる「俺は目覚めているのだ！（V. 7271)」で答え，かってホムンクルスが失神している彼の脳裡に読み取ったものと同じ，レダの懐妊の情景を幻としてー「これは夢だろうか，回想なのだろうか（V. 7275)」ー眼前に視る。この殊更の繰り返しは，上演の具体的な次元から言えば，最初の研究室の場合がエッカーマンの主張通り[20] 実際に舞台上で演じられ，ここは「生い茂った緑の葉叢（V. 9293)」の裏の出来事として，ファウストの言葉のみで伝えられる，と理解してよいだろう。だが，ここでの精神的な意味は，ペーネイオス＝ステュクスの忘却の要素に対する彼の意志の勝利を，即ち，この河を渡っても彼の意図が失われないことを示している。この幻視の間にケイロンが通りかかり，即座にファウストを受け入れ，渡河を申し出る。絶え間のない活動という点で，両者には相通ずるものがあるのだ。またそういう二人だからこそ，河の影響を免れ得るのである。

ファウストの頼みに応えて英雄達の師傅が彼らの思い出を語るくだりは，ギリシャ神話の素材をドイツの文学として成り立たせる知的な喜びを滲ませてはいないだろうか。それゆえなのか，ファウストにとって最大の関心事であるヘレナさえも，ケイロンが彼女の名を口にするまで，彼の念頭には浮かばない。

ケイロンはファウストの希求がヘレナの獲得であることを知ると，彼を「狂気（V. 7447)」と呼び，マントーのもとへ連れて行く。このマントーがテイレ

シアスの娘から医師アスクレピオスの娘へと変えられていることは，本論の冒頭で述べた通りである。それゆえ「アスクレピオスの治療（V. 7487）」は，一般に狂気の治療と解釈されている。しかし，そのアスクレピオスに医術を教えたケイロンにそれだけの技がないのだろうか。アポロドーロスによれば，アスクレピオスは外科医であり，その業績には，輸血による「死者の蘇生」がある[21)]。ケイロンは，本気でファウストの「狂気」を直すつもりではなく，アスクレピオスの秘術を受け継いだ筈のマントーがヘレナ復活のための方策を知っている，と判断したのであろう。そう考えてこそ「不可能を欲するひとが私は好きです（V. 7488）」という彼女の返事が意味を持つ。なぜなら，「治されたら他の連中のように凡俗になる（V. 7460）」からである。

マントー自身は，だが医術の力を行使せず，神殿の巫女として振る舞う。彼女の「永遠なる神殿（V. 7470）」は，その地理上の位置ゆえに，また伝承のマントーがテーバイ攻略の戦利品としてアポロンに捧げられ後に自らアポロンの神殿を建設したゆえに，アポロンのものと見る意見が普通である。しかしペルセポネイアのもとへ至る通廊を持つ神殿を，ことさらにアポロンへと帰することが自然だろうか。それが「月光のうちに（V. 7470）」に浮かび上がっているという記述は，単なる美辞麗句ではない。「古典的ヴァルプルギスの夜」に於いて，「月」は死＝ペルセポネイアとの結び付きで使われているからである。このことは，後のアナクサゴラスに関してさらに明白になる。また，ファウスト達が到着したとき，彼女が「夢見つつ（träumend）」あったことは，前述のペーネイオスと共通する特性を示している。最後の審判の日を持たないギリシャ神話の世界にとって，死は「永遠」なのであり，時がその回りを巡るあいだも，「踏み留まっている（Ich harre,）「V. 7481）」。エリクトーに続いて，彼女もペルセポネイアの代理である。死者の復活をしたためにゼウスの雷に打たれて死んだアスクレピオスの娘にこの役は相応しい。そして，ファウストを彼女のもとへ連れて来たケイロンも，実は不死を自らの意志で放棄した人物なのである。

彼女がファウストを暗い通廊へ導くことで，表面的にはこれから冥府行が始まるように見える。しかし，ここまでの経過を振り返って考察すれば，それぞれの形象の隠された役割によって，ファウストが本質的には既に冥界に踏み込んでいることが，判明する。重複を恐れずにその道筋をなぞると，スフィンクスが，言わば，とば口に座してファウストに行く手を示し，メフィストを退け，ステュクスの渡し守カロンならぬケイロンが河を渡して，マントー・ペルセポネイアの膝元へと連れて行くのである。そして以後ファウストの消息は第三幕まで途切れることになる。

一方ペーネイオス上流では，大地震が起きて河床が干上がり，山となって盛り上がる。サイスモスの突然の登場は，一種の舞台崩しの効果を持ち，それに続く小人達と鳥の戦いの発端が幕合い劇の印象を与えることと相俟って，気分転換の役に立っている。そこに急激な社会変動の政治哲学的な寓意を読み取る立場は無論正しい。しかしこれらの場面は，単に変化をもたらすためにのみあるのではない。ファウストがペルセポネイアのもとへ行き着くや，その道程が本質的に内包する死と暴力的で不完全な生産の要素を否定する行程が始まり，まず冥界のとば口が閉じられるのである。「地獄がすっかり裂けて出ようとも(V. 7529)」動くことのないスフィンクス達は，以後舞台の前面から退けられ，彼女達のもとへ戻るつもりだったメフィストーフェレスは帰路を断たれる。

サイスモスはレートーのお産に功績があったとされ，また地震を司ることから，ポセイドンを反映している。彼の吹聴する通り，地震で出来た山も，やはり生産のひとつであって，そこに産する金をめぐって蟻や小人達の活動が開始されるが，それはすぐさま凄惨な殺戮へと進展し，後にその結果をホムンクルスが目にすることとなる。

メフィストーフェレスは，帰路を失い行き惑っているうちに，ラミア達に出会う。見事に見える肉体も，実態は死によって破壊された「腐った手足 (V. 7117)」であることは初めから承知していながら，メフィストは手を出さずにはいられない。そして彼女達の「メタモルフォーゼ (V. 7759)」には何らの生産的な要因はないことを思い知らされ，這う這うの体でその場を離れ，「砂利 (Graus) (V. 7802)」や「小石 (Geröll) (V. 7804)」の中をさまようが，そこが曾て「砂利底の河 (Kiesgewässer) (V. 7464)」であったことには気付かない。そして，一夜限りの「古典的ヴァルプルギスの夜」の性格を超越して存在するオレアスに「天然の岩から (V. 7811)」呼び掛けられ，ペルセポネイアの力を象徴する「冴え渡る月光 (V. 7823)」も届かぬ暗闇に目をやると，そこにホムンクルスを見いだす。この設定は，ホムンクルスがペルセポネイアの影響を免れていることを示す。そして，ここでの両者の再会は必然である。なぜなら，この一帯が上述のように分岐路となっており，冥府への道がホムンクルスに対しても，メフィストーフェレスに対するものとは全く別の意味で，閉ざされていることを明らかにする必要があるからである。

簡単な言葉を交わした後，ホムンクルスはタレスとアナクサゴラスの後を追い，メフィストはもう一度さまよわされることになる。二人の哲学者は，「地・水・火・風」のいわゆる四大元素の生成作用について論じていたことが，Welle, Wind, Felsen, Feuerdunst などの言葉から窺われる (V. 7853ff.)。アナクサゴラスは古代に原子論を唱えた哲学者であるが，タレスが「自然とその活き

た流れ（V. 7861）」を「水」による緩やかな生成に結び付けるのに対し，ここではその他の元素の急激な作用を支持し，特に「火」を賛美する立場を取っている。そして，その側面において冥界との結び付きも持つらしいことは，「Plutonisch（V. 7865）」という言葉が端的に示している。

アナクサゴラスは「火」と「地」の代表者として，山の裂け目に生じ金を集める小人達に支配力を持ち，「光」を発するホムンクルスに好意を抱いたか，「王にしてやる（V. 7881）」と言う。そして彼の民である小人が鶴との戦いに敗れると，「ディアーナ，ルーナ，ヘカーテ（V. 7905）」という奇しき三位一体を唱え，天上に於いて，また地下に於いて，幾つもの名と顔を持つ女神のひそかな権能の繋がりを呼び覚ますのである。

「いままでは地下の御稜威を讃えることができた
　ならばこのたびは天上に訴えかけよう（V. 7900f.）」

ディアナとルナとヘカテの関係については，ヘーデリッヒの「ヘカテ」の項に詳しく紹介されている。即ち「彼女は一般に月と見なされ，（中略）天に於いてはルナと，地上にあってはディアナと，そして冥界ではヘカテまたはプロセルピナと呼ばれるという。」[22] そして「人間に対して三種の神威を持つ，即ち，ルナとしてその誕生に，ディアナとしてその生涯に，ヘカテまたはプロセルピナとしてその死に。」[23]

またヘーデリッヒは，ヘカテの崇拝が「岐路（Scheideweg）」で行われ，そこに供物が捧げられたことも記している[24]。それゆえ，アナクサゴラスはまさしく適切な場所で適切な相手に祈った事になる。しかし，その結果は，月からの岩が小人と鶴を諸共に破滅させ，丸かった山を尖らせる。サイスモスの山は，このエピソードによって，その生産性が否認されている。それは即ち，小人や黄金を生み出した「火」と「地」の暴力的な力なのである。同様に鶴達が代表する「風」の要素も，暴力ゆえに滅亡する。そして，アナクサゴラスが祈った対象であるプロセルピナ（ペルセポネイア）の魔力が，最終的な目的であるヘレナの再生を可能にする真に生産的な力とは別物であることが，証明されるのである。

生成を熱望するホムンクルスは，山を作った「創造的（V. 7943）」な技を称えざるをえないと言うが，タレスは，「単なる幻影にすぎない（V. 7946）」と見なし，彼をエーゲ海の祭りへと誘う。

その間にメフィストーフェレスは，「常に否定する霊（V. 1338）」として何物の生成にも意義を見いだせないがゆえにホムンクルスと袂を別ち，彼にとって古典ギリシャの世界に最も適した形態，即ち，究極の醜さであるフォルキュアスへとたどり着く。かれは変身した己が身を「ふたなり（Hermaphrodit）

(V. 8029)」と自嘲するが，ホムンクルスと同様に精神的存在である彼にとって，性別はさして重要ではない。彼がテッサリアの魔女やスフィンクスに対して示す性的興味は，悪魔を男性として考える伝統に則り，それに合った姿を取って登場しているという，単に現象的な理由からである。その性的興味の対象が女性に限らぬことは，第五幕に於いて，同じく精神的存在で性を超越しているはずの天使達に見せる醜態に現れている。だが，第三幕で直接ヘレナと渡り合うためには，やはりそれに相応しいペルソナが必要なのであり，紆余曲折を経た揚げ句にではあるが，それを獲得したからには，これ以上彼が舞台に留まる必要はない。

エーゲ海の祭りは，様々な死を照らして来た「月（ルナ)」の浄化で始まる。逸速く地震の気配を察してここへと逃れてきたセイレン達の歌声は，「嵐」を避けて深みにいた海の妖怪達（Seewunder)，ネレイデスやトリトン達を呼び集める。難破した船からの財宝で身を飾った彼らと，船乗りたちの災厄であるセイレン達が，ヘカテと一体をなす神体の光のもとに集うこの場面は，死に満ち満ちている筈なのだが，歌の調べは穏やかで美しい。アレンスは，この合唱がファウストの昇天の場の Doktor Marianus の章句と似通っていることを指摘している[25)]。「水」の要素と出会い，幾千幾万ものかけらとなって細波に照り映える清らかな月，即ち「二重に輝く（V. 7513)」月が，サイスモスの山を崩し，小人達を鶴もろとも死滅させたあのルナ＝ヘカテとは，同一にして，しかも全く異質のものであることを，それは感じさせている。中天に静止（verharrt）した状態は，月が死の契機を止揚したことの象徴であろう。

ルナを浄化するためには，船乗りを死に至らしめたセイレン達自身の罪も清められ，またネレイデスも「魚以上（V. 8063)」の，道徳性を備えた存在であることを証明しなければならない。本来ネレイデスは，後出のドリデスと同一の，海の乙女達であり，父ネーレウスの側から呼んだ場合と母ドリスの側から名付けたときで違ってくる，というだけに過ぎない[26)]。ゲーテが両者を区別してネレイデスに一段低い地位を与えたのは，上述の浄化をくぐり抜けさせるためである。彼女たちは「難破した者達の守り神（V. 8176)」カベイロイの神々を請来することで，文字どおり「変容した（verklärt）海の乙女達（V. 8165)」と呼ばれる。セイレン達は，カベイロイが彼女達の破壊的な力を凌駕して，自分達を罪から遠ざけてくれると讃えるが，神話的形象が数多くあるなかで，何故この異説に取り巻かれた神格にその役目が与えられたのか，その理由のひとつをヘーデリッヒに見ることができる。彼によれば，ヘカテがユノの怒りに触れて逃亡しているとき，まず産婦のもとに，次に死人を運んでいる男達のもとに身を隠した。よってユノは追跡を断念したが，ヘカテの身の穢れを清めるた

めにユピテルはカベイロイを遣わした，という[27]。即ち，ヘカテ＝ルナの浄化のためには，カベイロイは最適の神々なのである。

しかし，ここでのカベイロイの本質が，その比類なき成長と自己増殖という特色にあることを見逃してはならない。ホムンクルスは，自分の切望する生成の秘密をその神々が握っているかもしれないことに気付かず，見栄えの悪さを皮肉る。彼はタレスに連れられてネーレウスのもとを訪ね，しかし人間に対する忠告の無意味さに絶望している老人からプローテウスのところへ行くようすげなく追い払われてきたばかりである。タレスもホムンクルスの意見に同調するが，すぐさまプローテウスが声だけで横槍をいれ，カベイロイに対する彼らの評価を訂正する。「わしのような年寄りのほら吹きは，ああゆうものが好きなんじゃ。奇妙なものほど珍重するんじゃ。(V. 8225)」この言葉は，タレスがプローテウスの物言いとして「ひとを唖然とさせ，混乱させることしか言わない (V. 8157)」と予め警告しておいた，その通りのものである。しかし，そこにカベイロイに対する逆説的な批判はない。タレスの策略にのっておびき寄せられたプローテウスがまず亀の姿を取って現れることは，亀の甲羅に載せて運ばれたカベイロイと無関係ではないであろう。実際，プローテウスはホムンクルスの生成に手を貸すのである。

プローテウスは，ホムンクルスが精神だけで生まれたから肉体を持ちたがっているというタレスの説明には，「それこそ本当の処女の息子 (V. 8253)」と，はぐらかし，両性具有なので大丈夫だろうかという危惧には，「なおさら結構」と答え，そして更に

So wie er anlangt, wird sich's schicken. (V. 8258)

と，はなはだ曖昧模糊とした言葉を添える。「何とかなるように，何とかなる」とでも訳したらよいのであろうか，それとも，「彼が（現にわしの処へ）辿り着いている (anlangt) ように，（物事は総て）宿命 (Geschick) に従う」とまで言っているのだろうか。

しかし，それに続く「だが，ここであれこれ思案しても役には立たん。広大な海で，最初から始めなくてはならんぞ。まず小さなものから始めて (V. 8259ff.)」は，極めて実際的な助言である。「実際的」という意味は，ホムンクルスがそれに答えて「ここにはそよ風が吹いていますね。緑の匂いがする。この薫りは気にいりました。(V. 8265)」と，初めて触覚と嗅覚の快感を表明しているからである。フラスコの中の小人が視覚と聴覚を具え，幻視の能力さえ身に付けていることは，既に判明している。これらの能力は，先ほどのタレスの説明のうち「精神的な特性 (V. 8249)」と深く結び付くものであり，一方，触覚と嗅覚は，ホムンクルスに欠けている「摑まえどころのある，ちゃんとし

たものに（am greiflich Tüchtighaften）（V. 8250）」属するものといえよう。ホムンクルスが以前にはこれらの感覚を持っていなかったとの断言は不可能であるが，プローテウスの返答「そうだろうとも，かわいい坊や（V. 8267）」は，彼にその能力を与えたのがプローテウスであることを推測させるに充分である。即ち，彼は単なる助言を越えた手助けを既に提供し，「成立」への確実な第一歩を踏み出すことを可能ならしめている。これは，ファウストがスフィンクスの指示に従った時点で，既に本質的には冥府に這入り込んでいた事例と似通っている。

「成立」が一挙に成し得るものではなく，緩やかな変身につぐ変身を重ねて初めて達成されることは，上述の「まず小さなものから始めて」という言葉でも明らかにされている。そして，それは自在の変身能力を持つプローテウスの自家薬籠中のものなのである。彼の千変万化は，ゲーテが自然の持つ二つの大きな駆動輪（Triebräder）と見なしていた「向上（Steigerung）[28]に通づる性格を持ち，ホムンクルス自身のメタモルフォーゼを活性化する契機として働く。だからこそ，かつて同じく「成立」の希望を打ち明けられたネーレウスは，プローテウスのもとへ行くことを勧め，「どうやったら成立し，変身できるか（Wie man entstehen und sich verwandeln kann）（V. 8153）」を尋ねよ，と告げたのである。即ち，ここでの und は同一の内容を繋ぐ働きをしている。

自然のもうひとつの駆動輪である「対極性（Polarität）」は，ホムンクルスの両性具有や，後述するように「火」と「水」などのモティーフに華麗な詩的表現を与えられている。

ホムンクルスに対するプローテウスの好意は，ファウストに対するケイロンと同じく，両者の共通点に基づく。自分を Fabler（V. 8225）と呼ぶプローテウスは，Phantast（V. 6922）であるホムンクルスに共感を懐くのである。そしてファウストはその命を（即ち，ヘレナを）Fabelreich（V. 7055）で求めるがゆえに，ホムンクルスの「成立」はヘレナの再生と内的に結び付いている。

ホムンクルスの肉体化に向けてプローテウスは極めて微かな端緒を与えたが，それに留まらず，すぐさま次の段階へと自ら導いて行く。「それに，もっと先に進めば，もっと気に入るぞ（V. 8268）」は，単に空間的な意味を越えた，含蓄のある言い回しである。それに続く「岬の空気」は単なる口実であって，真の目的はガラテイアの行列にある。

行列の先頭ではテルキネスが，自分達こそ初めて神の像を作ったと造形の業を吹聴するが，プローテウスは手厳しく批判する。それは固定化によって命を失ない，ただ一度の自然の暴力の前に潰え去ってしまったものだからである。「生きる身には浪のほうこそ役に立つ。プローテウスのイルカが永遠のわたつ

みへとお前を運ぶ。(V. 8315ff.)」この「浪」は，たゆまぬ変化の象徴である。イルカに変身したプローテウスは，丁度ケイロンがファウストに対してしたように，ホムンクルスを背に乗せ，「海と番わせる (V. 8320)」。

それによってホムンクルスは，「閉ざされた空間 (V. 6883)」の中で「結晶化 (V. 6860)」によって出来た存在から，今はまだ「精神的 (V. 8327)」にではあるが，「縦横無尽に (V. 8528)」自然の中を動き回る生への進展を約束される。性急な人間化を戒めるプローテウスに対して，タレスは，その時代のひとかどの人物になるのなら別だとの趣旨を述べ，プローテウスから皮肉の応酬を受ける。彼の目から見れば，それも一種の固定化であって，「青ざめた幽霊ども (V. 8337)」の間を何千年も同じ様子でうろついていることは，壊れてしまった神像より少しは長持ちするだけの，哀れむべき状態なのである。タレスとプローテウスは，いづれもホムンクルスの成立に力を貸すが，両者の見解がそれについて一致しているわけではない。

タレスが浜辺に一人残されると，セイレン達が歌い，ネーレウスが近寄って，月の暈が愛に燃える鳩の群れであると告げ，タレスもそれを是認する。これにより，曾ては死の象徴であった月に，愛と生命の特質が付与され，ドリデスが恋人の若者達を父ネーレウスに引き合わせるに際して，月に「光と影 (V. 8391)」を[29] 賜るよう祈ることも可能となる。

彼らをドリデスは難破より救い出し，自分達の夫とするために，その不死を父に請い求める積もりなのである。これもまた一種の再生であるが，「ゼウスにのみ叶えられること (V. 8411)」として，ネーレウスによって退けられる。このエピソードは，ネレイデスとは対照的なドリデスの愛と生命の豊かさを描くだけではなく，いわゆる deus ex machina 式の安易な生命付与への期待を心理的に否定する働きを持つ。即ち，ヘレナの再生は決してこの方式で行われてはならないのである。

そしてガラテイアが貝殻の車に乗って近づく。彼女がアフロディテの代理として「古典的ヴァルプルギスの夜」に於ける究極の美の象徴であることは，既に第8145行以下に明言されている。しかし，この待ち続けられた美女は，自身にも統制の効かない力に引き攫われて，一瞬のうちに通り過ぎてしまう。それはまるで，詩人に与えられる美の啓示のようである。

Du bist es, mein Liebchen! (V. 8424)

ネーレウスは，この一瞥のために一年を過ごせると言う。プローテウスが Fabler であったように，ネーレウスもまた，詩人のもう一方の側面を現しているのであろう。変化と珍奇を好むプローテウスは，詩的素材に形を与え育て上げる慈しみ深い父のような存在として，またネーレウスは，瞬間の美の啓示の

ために爾余の生活を耐える存在として。

ガラテイアについての詳しい描写は，それゆえ彼女のアトリブートである「貝殻の車」に関してなされざるをえない。それによると，この車には隠された特性として，四大元素のうち「地」「風」「水」の三つが備わり，そしてまた四大元素総てを結び合わせる力も付与されていることが分かる。それはまず，管理者であるプシュレンとマルゼンの言葉，即ち，Höhlengrüften (V. 8359), Lüften (V. 8362), Wellengeflechte (V. 8367) に示される。「地」が，Lüften と韻を踏むために Grüften という形を取っているのは，後に四大すべてが賛美されるときの第8485行と同じである。そして四大を結びつけるものは，第8144行でアフロディテの名とともに挙げられた Farbenspiel である。これは，ゲーテが『西東詩集』に収められた詩「再会 (Wiederfinden)」で用いた重要な要素であり，それこそ，原初に分裂した万有が再び互いに愛し合うことを可能ならしめたものだからである[30]。

タレスは，美と真に溢れた壮麗な行列を目の当たりにして，自説の正しさに歓喜の声をあげるが，総てを「水」だけに帰する彼の立場は，まだ一面的である。そしてこの行列に，いまやプローテウスと完全な唱和 (V. 8488ff.) をする程に一体化したホムンクルスが近づいて行く。「祝福された憧憬 (Selige Sehnsucht)」の蛾のように，より高い存在に到達するために憧れの対象へ引き寄せられるホムンクルスは，しかしタレスの見解からすれば，「プローテウスに唆されて (von Proteus verführt...) (V. 8469)」なのである。

かつてファウストの持つ「鍵」がヘレナの亡霊に触れて爆発を引き起こしたように，ホムンクルスは，ガラテイアの貝殻の車に触れて砕け散る。彼の憧れが成就し，「成る」ためには，まず「死な」なければならない。夏の夜の蛾は炎に同化したが，古典的ヴァルプルギスの夜を飛ぶ光は，自らが炎と化す。しかし，ホムンクルスの「死」は，ペルセポネイアの支配する死とは本質的に異なっている。これによって元素すべてが揃い，また，それらを結び付ける力の存在を得て，神秘的な生成力が活性化されているのである。そして，すべての生命の源であるエロスと四大元素への，全員による賛美のうちに第二幕は閉じられる。

このようにして筋建ての上でも，またより高度な詩的要請の次元でも完全に復活されたヘレナだが，第三幕の終局では，オイフォーリオンの死によって，人物としては再び冥界へ戻らなければならなくなる。しかし，その本質が再び虚無へと失われることはない。それは，ヘレナと共にこの世の光のもとへ呼び戻された侍女達に託して，大胆にそして美しく謳われている。

トゥルンツの註によれば，侍女達からなる合唱隊は四部に分かれ，樹の精ド

リアーデン，山の精オレアーデン，泉の精ナヤーデン，葡萄の精バッカンティネンになる，とされるのだが[31]，彼女達の第一部が「囁くような枝の震え（V. 9992)」や「風に繁らせ（luftigem Gedeihn）（V. 9995)」で「風」を歌い，第二部が「岩壁（V. 9999)」で「地」を示唆し，第三部の「小川（V. 10005)」は明白に「水」を意味し，第四部では酒による陶酔と太陽の神ヘーリオスによって「火」の要素が暗示されていることも見逸すべきではない。即ち，エーゲ海の祭で讃えられた四大元素によって活性化された生命力は，もはや「個人ではなく（V. 9986)」「永遠に生き続ける自然（V. 9989)」として「二度とハーデスへ帰ることはない（V. 9988)」のである。

註

1) 以後ギリシャ名はドイツ語読みに拘泥せず，日本語で一般性のあるもの，又は原語に近い発音のものを採用する。
2) vgl. Goethes Werke. Christian Wegner Verlag. Hamburg. 8. Aufl. 1967. 以下 HA. と略す。Bd. 3, S. 584f.
3) HA. Bd. 3, S. 432.
4) Zweiter Entwurf zu einer Ankündigung der „Helena". HA. Bd. 3, S. 438ff.
5) a. a. O., S. 443.
6) Eckermann, Johann Peter: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. 1827年1月15日。以後 Eckermann と略し，日・月・年のみ記す。
7) マイケル・グラント，ジョン・ヘイゼル共著 『ギリシャ・ローマ神話事典』 大修館書店　1988　P. 188.
8) 第三巻，第一章
9) a. a. O., S. 444.
10) Eckermann. 15. 1. 1827.
11) Eckermann.
12) Eckermann. 16. 12. 1829.
13) ebd.
14) ebd.
15) Emrich, Wilhelm: Die Symbolik von Faust Ⅱ, Sinn und Vorformen. Athenäum Verlag. Frankfurt a. M.·Bonn 1964. S. 252.
16) ソポクレス：『オイディプス王』 岩波文庫。赤105-2。藤沢令夫訳。40頁。
17) HA. Bd. 3, S. 567.
18) Hederich, Benjamin: Gründliches Mythologisches Lexikon. Leipzig 1770. Reprograph. Nachdr. Darmstadt 1986. Sp. 1810. これはゲーテの使用した原典のひとつである。vgl. Goethes Brief an Schiller, Zürich 25. 10. 1797.
19) 『イーリアス』 呉　茂一訳　岩波文庫　赤102-1　上90～91頁。(　)内筆者。
20) Eckermann. 16. 12. 1829.
21) アポロドーロス：『ギリシャ神話』 高津春繁訳　岩波文庫　赤110-1　147頁。
22) a. a. O., Sp. 1207.
23) ebd.

24) a. a. O., Sp. 1205.
25) Arens, Hans: Kommentar zu Goethes Faust Ⅱ. Carl Winter・Universitätsverlag. Heidelberg 1989. S. 517.
26) vgl. Hederich, a. a. O., Sp. 1722.
27) a. a. O., Sp. 1204.
28) vgl. HA. Bd. 13, S. 48.
29) ゲーテの『色彩論』によれば，光と影から色彩が作られる。そして色彩は愛に通づる。詳しくは，次の拙論を参照されたい：『西東詩集』の詩「再会」について。鹿児島大学 文科報告 第十四号 第三分冊 pp. 85～97 鹿児島大学教養部 昭和57年9月。
30) 上掲論文参照。
31) HA. Bd. 3, S. 603.